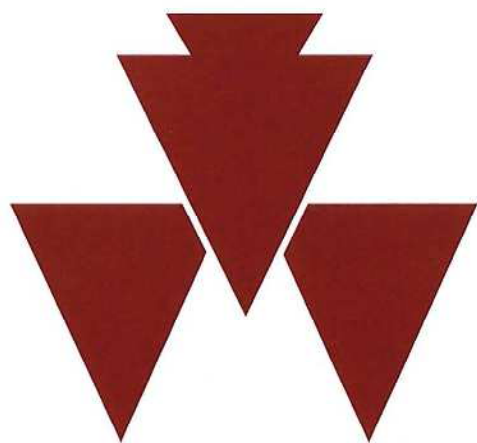
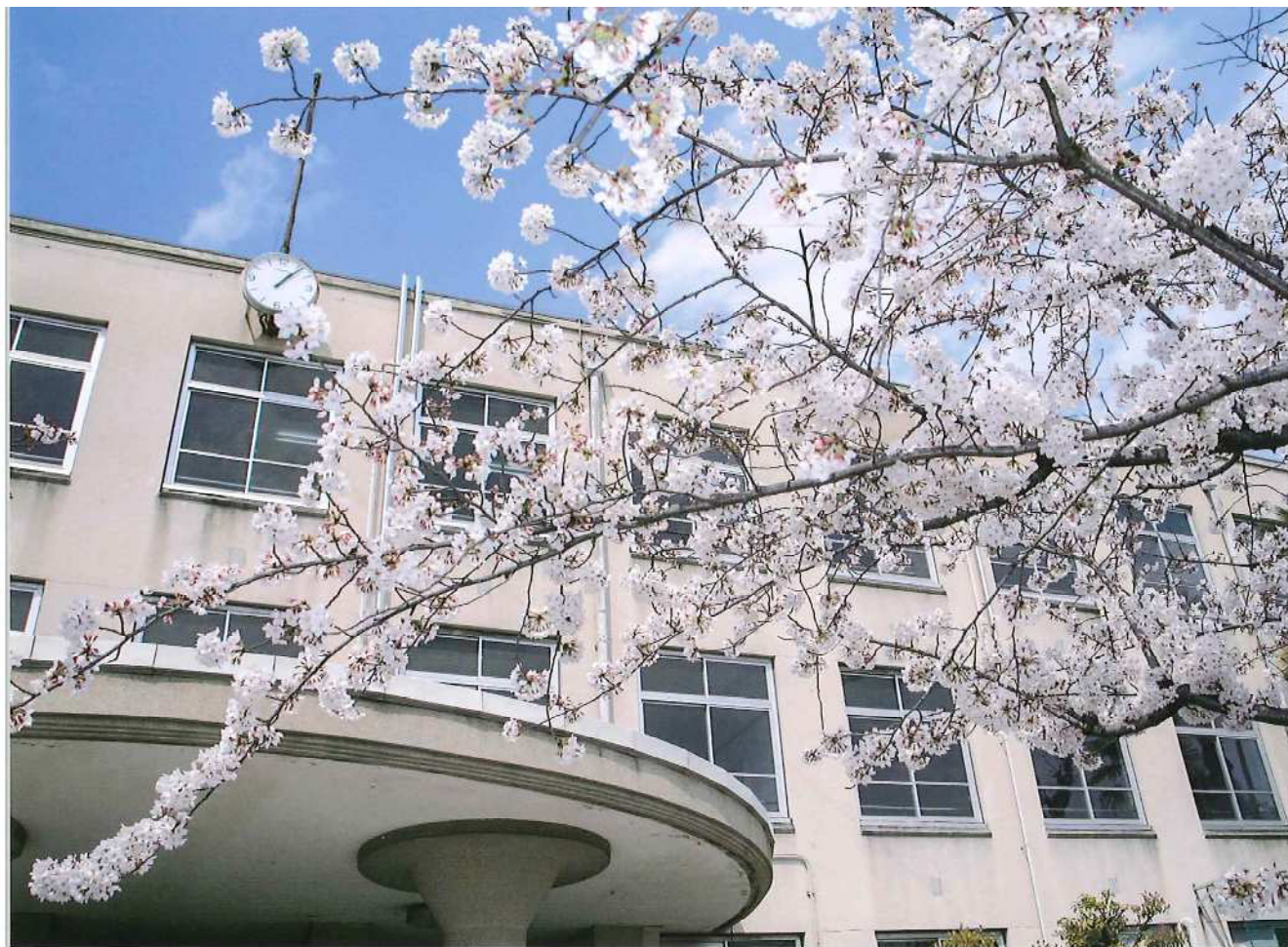


京都市立洛陽工業高等学校
開校記念誌





玄関の桜

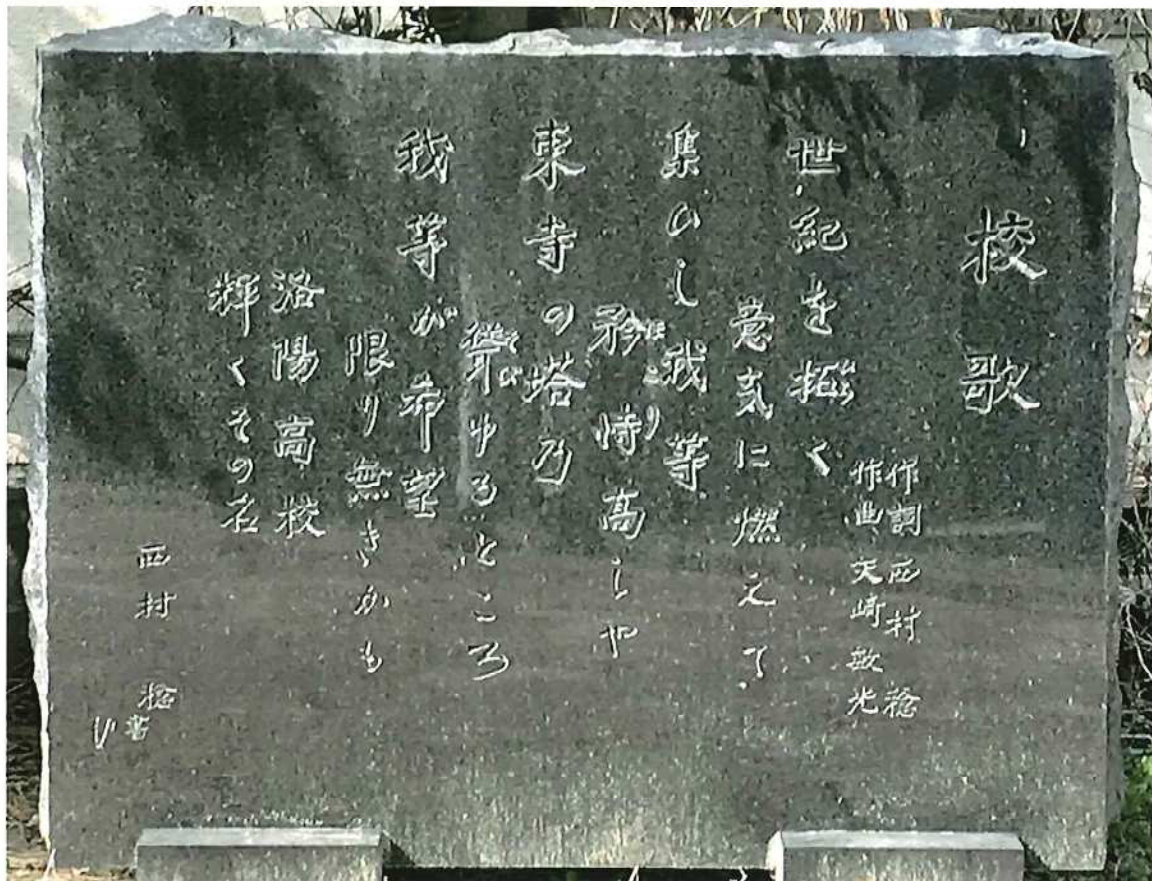


創立百周年記念碑

正門







校歌石碑

普賢象桜



電子工業科記念碑





定時制記念モニュメント

市電・市バス停留所







洛陽工業高等学校全景

校旗・校章



染織学校

制定年月日は不詳であるが、明治30年代の中頃には既に使用されていた。藍の花弁のなかに2つの桴を交差させてデザインしたものとされている。



京都市立工業学校～
第一工業学校

大正8年4月「市立工業学校」と改称されたことに伴い、同年5月に制定された。この校章は、昭和23年3月まで引き継がれた。



洛陽工業高等学校

昭和23年4月、学制改革で「京一工」が「洛陽工高」となった際、在校生から公募した作品に手を加えて、同年7月に制定された。同年10月の公立高校の再編まで、わずか3カ月しか使用されなかった。

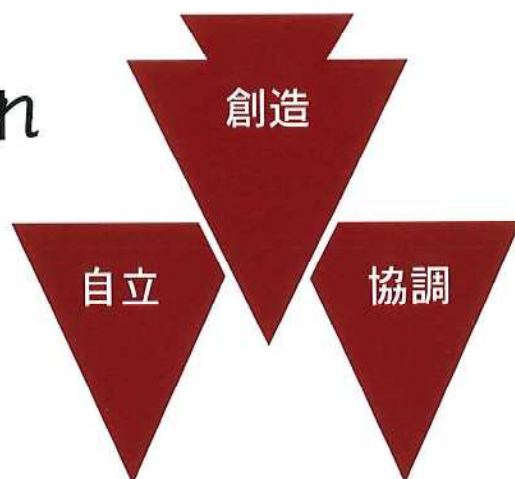


洛陽高等学校～
洛陽工業高等学校

昭和23年10月に実施された公立高校の再編成で「洛陽高等学校」となった際、在校生から公募した作品が、昭和24年1月に採用された。昭和38年に単独制の「洛陽工業高等学校」となってからも、この校章は引き継がれ、閉校まで使用された。

教育目標と教育方針

「夢」を語れ



教育目標

真理と正義を愛し、人類の幸福を希求し、創造性に富む
感性豊かな工業人の育成を目指す。

教育方針

創造 工業教育を通して創造性に富む人を育てる。
自立 自ら学び考え行動できる人を育てる。
協調 相手の立場や気持ちを理解し尊重できる人を育てる。

人材育成

基礎・基本を大切にしながら、挑戦する意欲を持ち、限界や課題を突破する人材を育てます。また、実際に『ものをつくる』『しごとをする』ことを通して自ら考え、判断し、表現することができる創造性豊かな人材の育成に努めます。

求める生徒像

- *相手の立場に立った気遣いができ、他人を思いやる心をもつ人
- *『ものをつくる』ことを通して、知の探究・創造・発展に意欲のある人
- *専門知識・技術を身につけ、社会の発展に貢献したい人
- *『ものをつくるしごと』の探究を通して、多様な文化・価値観や規範・倫理観を学び、地域・国際社会で活躍したい人

校 歌

京都市立洛陽工業高等学校 校歌

作詞／西 村 稔
作曲／矢 崎 敏 光

Tempo: marcia maestoso
M.M. ♩ = 84 *mf*

(1) せ い き を ひー ら く い き に も え て ど
(2) し ん そ を の もー とい む の いし げ かん た め し つ な
(3) り そ う の しゃ か ら い の の じつ を げ かん た め し つ な

いぶ し わ れ ら ほ こ り た か る し や と う
む や れ ら ら あ え み ひ い そ し み あ

じ の ま と の の そ び ゆ る と こ ろ わ
や り ま き の こ つ た え ゆ か し く れ

ら が き ぼ う て か ぎ り な き か も
ら が ゆ う じょう は き よ く ら

よう こ う こ う か が や る く の な
よう こ う こ う た ど し く の な

作詞者西村稔は当時の国語科教諭、後の副校長、校長である。
作曲者矢崎敏光は当時の音楽担当教諭である。
昭和24年に洛陽高校校歌として選定され、引き続き洛陽工業高校校歌となった。

一 世紀を拓く意気に燃えて
集ひし我等衿持高しや
東寺の塔の聳ゆるところ
我等が希望限りなきかも
洛陽高校 輝くその名

二 真理を探究むる意志を堅めて
学ぶや我等敢てひるまじ
あゝ山脈の連なるところ
我等が前途遥かなるかな
洛陽高校 轟くその名

三 理想の社会の実現期して
努むる我等互みにいそしみ
古き都の伝統ゆかしく
我等が友情清く正しき
洛陽高校 崇しやその名

京都市立第一工業学校 校歌

作詞／石 川 雄 明
作曲／東京高等師範学校

一 春にはさくら秋はもみぢ
叡山のすがたは高く
加茂川のながれは清し
歴史もふるぎ京の都
はぐくまむ美しの心
はぐくまむゆかしの心
わが学び舎はその名著し
学問の理想は遠く
成業のほまれは永し
恵は深く幸は溢る
やしなはむまことの心
やしなはむけだかき心
智能を磨き徳を修め
工業の進歩を図り
皇国の文化を資く
たふとき使命重き任務
きたへなむをきし心
きたへなむ不撓の心
豊かに造り品を選び
国産の聲價を高め
人生のさかえを添へむ
たふとき使命重きつとめ
むちうたむ自強の心
むちうたむ進取の心

第一工業高校校歌は大正11年の京都市立工業学校時代に制定され、一工時代も引き続いて歌われた。
大正13年に、1番の歌詞の「歴史もたふとき……」が「歴史もふるぎ……」に、「はぐくまむみやびの心」
が「はぐくまむゆかしの心」に改訂された。作詞者石川雄明は市立工業学校当時の国語科教諭である。
3、4番の歌詞は生徒になじまず、昭和に入ってから一般に歌われることが少なかった。